

Eureka X

六年制通信 No.30 令和4年12月23日(金)号

off

この時期になると、毎年「除日起講」を思い出しますね。うちの中高の生徒は全員これを知っていますね。林羅山の言葉です。吉田松陰の『講孟余話』にある「学問の大禁忌は作輟なり」も皆さん知っていますよね。建学の精神や校訓、また四大綱もこの学校で学んだ全員が知っていることでしょうか、それ以外にも同じ学び舎で学んだ生徒の誰もが知っている言葉がたくさんあるといいと、私はそう思っています。卒業して大人になっても、大晦日が近づくと「除日起講」が思い出される、それが中高の同級生全員に起こるなんてちょっとロマンチックな感じすらしませんか。

さて、明日から冬休み。と言っても夏と違って短いですけどね。それでも計画的に勉強はできます。私事ですが11月にニール先生から『A Serendipiter's Journey』を頂きました。ちょっと早いけど先生への誕生日プレゼントです、と。ずいぶん前にこの本が手に入らないかと相談したことがあって、ニール先生、そのことを覚えていてくれたのですね。私が生まれたころのニューヨークを若いジャーナリストがルポしたレポートです。アパートの18階から下の川へ糸を垂らし鰻を釣る男、職業は運転手なのですが自分は運転手つきのロールスロイスを持っている不思議な男、ドアに14個の肩書をつけている男などなど、変な人ばかり。面白いのですが俗語や古い表現ばかりで読み上げるのに苦労しました。それで、ちゃんと計画的に原書を読まないといけないと考えて、冬休みにはカズオ・イシグロの『Never Let Me Go』から始めるつもりです。君たちも自分の計画を立てて、勉強を続けましょう。To go on is to go up. つまり「継続は力なり」ですし、それこそ「学問の大禁忌は作輟なり」ですからね。

あと、この休み中にテレビや携帯など電子機器の(学校のiPadは仕方ないか)電源を切ってみてはどうでしょうか。仏文学者の奥本大三郎は「世に得がたいものは、きれいな水と静けさと上品な言葉づかい」と言いましたが、私も全く同感です。きれいな水はともかくとして、「静けさ」と「上品な言葉づかい」は意識して求めないと得られなくなりました。とにかく現代は騒がしすぎます。喧しすぎます。そして下品な言葉に溢れています。テレビもネットの世界もそうですね。誰もが、別に専門家でもないのに、どんなことにも何かをコメントしなくては行けないのですかね。で、その薄っぺらなコメントを皆が有難がって読むんですか。私には病気としか思えないですね。「虚栄心は人を饒舌にし、誇りは寡黙にする」という言葉があります。意味のない饒舌は虚栄心の裏返しだということです。恥ずかしいですね。君たちには「静けさ」と「上品な言葉づかい」を求めて、意識して電子機器の電源をoffにして、本を読んでほしいと思います。

冬休みのおすすめ

・『歎異抄』 (岩波文庫)

中2の女子で岩波新書の『言語学の誕生』(風間喜代三著)を読んで、しかもクラブ活動の一環として内容の要約を発表した生徒がいると聞きました。驚きました。1978年に出た本ですが、著者は当時東京大学の言語学科の主任教授で、副題が「比較言語学少史」とあるように、極めて専門性の高い本です。私は学生時代にこの本で勉強しました。中学2年生で、よくこんな本が読めるものだと感心しました。同時に、ということ、たまには、かなり難易度の高い本をこのコーナーで紹介してもいいのではないかと、むしろあまり簡単に読める本では物足りないのではないかと、そう考えるようになりました。古文で書いてあっても、ひょっとしたら読めるのではないかと。

それで今回は親鸞の言葉を弟子の唯円が記した『歎異抄』にしました。この本には恐らく誰もが一度は耳にしたことがあるに違いない、あの有名な「善人なおもて往生をとぐ、いはんや悪人をや」があります。手元の文庫では45頁にあります。これは「善人でさえ極楽浄土へ行けるのだから、ましてや悪人ならなおさら行ける」という意味ですが、普通は逆に考えますよね。悪人が行けるなら善人は当然行ける、というように。親鸞も、普通はそう考えるだろうが、と書いています。ここで言われている「悪人」というのは罪を犯した人ではなく、煩惱から逃れられない私たちのことを指しています。善行を施して、それにすがって自力で極楽に行こうとするものは、ただひたすらに阿弥陀の慈悲にすがる者には及ばない、そういうことらしい。他力本願の難しい教義は私にもわかりませんが、君たちも一度手に取ってみるといいよ。

ちなみに「たとひ法然聖人にすかされまひらせて、念仏して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからずさふらふ」という箇所があります。法然は親鸞の師匠ですね。たとえ師匠に騙されて念仏を唱え地獄に落ちたとしても私は後悔しない、そう言っています。師の法然に対する絶対の信頼が親鸞にはあるのです。こういうの好きだな。

・吉川英治 『三国志』 (吉川英治歴史時代文庫 全8巻)

これが、日本の『三国志』のスタンダードですね。劉備玄德と関羽、張飛の三人による「桃園の誓い」、諸葛亮孔明を迎える「三顧の礼」、日本人なら知っておきたいエピソード満載。本当に面白いですよ。ただ、玄德が死んでから急速に読む気がしなくなったのは私だけでしょうか。こういう本を読むと、誰に、またどんな場面に魅力を感じるかが人によって違ってきます。自分にはこういう人に、こういう場面に惹かれる感性がある、そう発見することを自分を知るというのです。

・司馬遼太郎 『坂の上の雲』 (文春文庫 全8巻)

前にも紹介したかもしれませんが、名著ですからまだ読んでいない人はこの冬トライしてみてください。小説日露戦争みたいな本で、司馬さんは一切のフィクションを排して書いたと言っています。つまり史実に基づかないことは書いていないということです。主人公は秋山好古、真之の兄弟と正岡子規です。私は秋山好古に最も魅力を感じています。好古が大酒のみであったというところも、もちろん大好きです。

BGMは 山下達郎 のクリスマス・イブでした…。